

ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰

—僧伽に関する儀礼・信仰を中心として—

ティンマーウー

0. はじめに

本論は、ミャンマー在家仏教徒の信仰形態を僧に関する儀礼・信仰を中心に考察する。ミャンマーには、仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教などがあり、仏教徒はそのうち 85%を占め、すべてテラワダ仏教である。殆どのミャンマー在家信者は自身を仏教徒と考えているが、民間信仰としての魂信仰、土着信仰、占い、厄払いなども信仰している。そのなかにヒンドゥー教などの宗教の影響もある。そういう仏教徒をミョエフラー・ブッダバーター (Miyoe Phalar Buddha Barthar 先祖伝来の仏教徒)¹という。仏教国でありながら、ミャンマーではタケツ・ブッダバーター (Talge Buddha Barthar 真実の仏教徒)²が少なくなっている。グローバル化する世界の中にあってミャンマー仏教の在家信者は、先ず本當の仏教徒にならなければならないと考える。ミャンマー仏教徒の在家信者の信仰を考察することによって、ミャンマー仏教徒の将来の展望も開けてくるであろう。現地の仏教徒の状況、特に在家信者の信仰形態をフィールドワークの調査成果に基づいて報告し、僧伽 (saṅgha 僧団) と在家信者との関わり方を論じていきたい。

またミャンマーでは、仏、法、僧、親、師について「アナントー・アナンダ・ンガーパー (anando ananda ngapar)」³という戒めがある。「アナントー・アナンダ・ンガーパーを忘れないように。それを尊敬する子どもは一生困らない。」という戒めは幼い頃から教えられる。そういうわけで在家信者は日常生活において仏法僧を供養し、親、師に礼節を持って接することを心掛けて暮らしている。従って、本

¹ 仏陀、ダンマ (法)、サンガ (僧団) の徳について習得しないまま、先祖から受け継いだ文化として信仰している信者。

² 仏陀、ダンマ、サンガの徳について習得し、仏教を積極的に信仰する信者。

³ アナントー・アナンダは無限、ンガーパーは五徳 (三宝・親・師) を意味する。五徳のそれぞれを、ミャンマー語ではパヤー (仏)・タヤー (法)・ティンガー (僧)・ミバ (親)・サヤー (師) という。

論ではアナンタ・ンガーパーのうち僧に関する儀礼・信仰について詳しく述べる。

1. ミャンマー仏教徒から見る僧・サンガ(僧伽)とは

テーラワーダ仏教においては、三宝の一つである僧は俗世で高貴な存在として認識されている。この俗世では五つの得難いことがある。人間に生まれることもその一つである。また人間に生まれても俗世間を離れて仏道に入る事は更に難しいのである。

たとえ人間の地位を得ても、仏陀の教えに出会っても、信仰心を持っても、仏道に入って出家するのはなかなか難しいのである。自宅を離れ、剃髪し、サフランの袈裟だけを着て、他人に施された物だけで出家生活をしている。それだけでも尊敬すべきものがある。それだけではなく、食事する時の規則、袈裟を着る時の規制、話す、住む時に従う規律など多くの戒律がある。仏が制定した律蔵に従うのは単なる信仰心を持つだけでは到底実行出来ない難事である。そのため、ミャンマーの在家仏教徒は、仏道に入った僧を非常に尊敬し信仰しているわけである。

仏陀の教義がこの俗世に今日までに存在しているのはタンガ・ヤダナー(thanga yatanar 僧宝)⁵のお陰である。仏陀が成道した時から現在まで 2563 年以上教義を継続して保持してきた。また、第 6 回まで仏典結集を行って保持してきた。何と言っても僧宝は法が消滅しないように世代から世代に継続して保持したのである。僧宝はそういう責任を持ちつつ、在家信者にも教義を忠実に指導する義務を果たしている。そういうわけで、ミャンマーの在家信者は僧宝を尊敬し、感謝し、頼り、合掌し、礼拝しているのである。

⁴ ①buddhuppādo dullabho「仏陀の出現は難しい。」

②manussapajjābo dullabho「人間として生まれることは難しい。」

③saddhāsāpatti dullabhā「信仰を持つことが難しい。」

④pabbajjā dullabhā「出家することは難しい。」

⑤saddhammassavanāṃ dullabham「正法をきくことは難しい。」

『スッタニパータ註』(Suttanipāṭa-Appakathā), Uragavaggo, 4, Kasibhāradvājasuttavaṇṇanā (Cs pp 120/PTS pp 133)

⁵ thanga yatanar はバリー語の saṅgha-ratana をミャンマー語で発音し表記したものである。パヤー・ヤダナー(payar yadanar 仏宝)、タヤー・ヤダナー(tayar yanadar 法宝)、タンガ・ヤダナー(thanga yatanar 僧宝)の三宝は在家信者の日常信仰儀礼の祈願文、帰依三宝、として唱えられ礼拝されている。

2. 現代における二種の僧

僧伽には沙弥(sāmaṇera)⁶と比丘(bhikkhu)という二種類の僧が居る。ミャンマー語では前者をコーイン(Ko Yin)あるいはマウンイン(Mg Yin)と呼び、後者をヤハン(Ya Han)あるいはウーゼイン(U Zin)と呼ぶ。ターマネイは比丘になるための見習僧で通常 7 歳以上 20 歳未満の男子である。ターマネイは十種のレイン(linga 相)⁷と十種のダン(daṇḍa 罰)⁸を守らなければならない。14 の捷度義務⁹や 75 の戒条のセーキヤ(Sekhiya 衆学法)¹⁰などの 109 の戒律を忠実に守らなければならない。比丘は 227 の戒律¹¹を忠実に守らなければならない¹²。

ミャンマー仏教徒の男性であればターマネイ或はコーイン(koyin)として仏道に入る伝統的な習慣がある。そのプロセスをシンピュ¹³(shin pyu 得度)という。それは 5、6 歳以降から 20 歳末までに行われる。シンピュを受けてコーインになるため、三衣¹⁴、帯、針と糸、剃刀、鉢、水漉という出家の八物が

⁶ ミャンマー語ではターマネイ(tamane)と発音される。

⁷ 十種の相とは、①生き物を殺す②与えられない物を取る③不梵行をする④嘘を言う⑤酒を飲む⑥仏陀を誹謗する⑦法を誹謗する⑧僧団を誹謗する⑨邪見者になる⑩比丘尼を汚すという十の相である。

⁸ 十種の罰とは、①時間外に食事する②踊り・歌・音楽を見たり聞いたりする③花飾りをつけたり香りをつけたりする④高い寝床や立派な寝床に寝る⑤金銀を受け取る⑥比丘達に損害をもたらす⑦比丘達の住居を失わせる⑧比丘達の利得を妨げる⑨比丘達を誹り罵る⑩比丘達を仲違いさせることである。

上記の十種の相の①から⑤までと十種の罰の①から⑤を併せると、いわゆる沙弥の十戒に相当する。

⁹ 14 の捷度義務は捷度部に説かれている。それは、①客僧の義務②居住僧の義務③旅行僧の義務④随喜の義務⑤食堂に関する義務⑥托鉢に関する義務⑦林住に関する義務⑧住居に関する義務⑨暖房室に関する義務⑩便所に関する義務⑪和尚に対する義務⑫(和尚が)弟子に対する義務⑬阿闍梨に対する義務⑭(阿闍梨が)弟子に関する義務である。

『律蔵』小品(*Vinaya Cūlavaggaṇṇī*) (Cs pp 373-410/PTS pp 207-231)

¹⁰ 衆学法とは比丘に課される具足戒のうち、行儀作法に関する禁戒の総称である。『律蔵』大分別(*Vinaya, Mahāvibhaṅga-Sekhiya*)に詳しく説明されている。

¹¹ パーラージカ(Pārājika 波羅夷)4戒、タンガーディセータ(Saṅghādisesa 僧殘法)13 戒、アニヤタ(Aniyata 不定法)2 戒、ニッタツギヤ・パーセツティヤ(Nissaggiya-Pācittiya 捨墮法)30 戒、パーセツティヤ(波逸提 Pācittiya)92 戒、パーティデーサニーヤ(Pāṭidesanīya 提舍尼法)4 戒、セーキヤ(Sekhiya 衆学法)75 戒、アディカラナ・タマター(Adhikaraṇa-Samathā、滅淨法)7 戒である。『律蔵』経分別(*Sutta-vibhaṅga*)大分別(*Mahāvibhaṅga*)に詳しく説明されている。

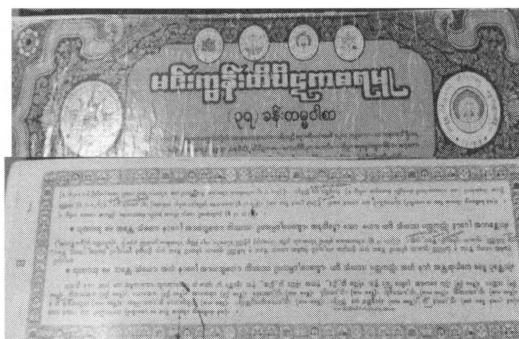
¹² U San Thin Hlaing (1994) を参照

¹³ シンは比丘、国王、仏に付される敬称であり、ピュは「～する」に当たるので、シンピュは男児を「尊い人にする」ことを意味する。

¹⁴ 三衣とは、重衣(Saṅghaṭṭi)、上着衣(Uttarāsāṅgha)、下着衣(Antaravāsaka)である。

必要である¹⁵。八物が揃えば一人の僧の下で出家することが出来る。コーインの僧院生活の日数には決まりがないが、少なくとも一週間は実施することが多い。出家の戒律さえ守れば好きなだけ継続できる。沙弥から在家に戻らず比丘まで進んで永続出家者として続ける者も居る。

比丘になるには具足戒を受けなければならない。具足戒を受けるには、①真実の人間であること②真実の男性であること③自由者であること④公務についていないこと⑤借財がないこと⑥両親の同意を得ていること⑦三衣一鉢を保持すること⑧20歳になっていることの資格が必要である。また、①ハensen病②腫瘍③しっしん④結核⑤てんかんなどの病気を持つ者は比丘になる具足戒を受けられないのである¹⁶。それらはカンマワサー (kammavācā 羯磨語) の最初の1ページと2ページに書かれているので、ティーン (sīma 戒壇) でカンマワサーを合誦する際に確認される。その資格審査を経た後で受戒作法を続けることができる。受戒が終わった時点で比丘の誕生となる。



カンマワサー (kammavācā 羯磨)

比丘として一週間から数ヶ月間の短期で僧院修行生活を経験することを、ミャンマー語ではドウラバ・ヤハン (dullabha bhikkhu)¹⁷という。ミャンマー全国の出家者数は、2019年度の宗教省の調査報告によると、比丘とターマネイ合計で 520,444 人¹⁸である。宗教省の調査は毎年安居の時期に行われている。一時的出家者と還俗者の出入があるが、出家者が雨安居を通して1年間の僧院修行生活を過ごさなければ国家調査リストに報告されないそうである。¹⁹

¹⁵ 現在のシンピュは富裕度に合わせてより豪華に行われることが多い。

¹⁶ 以上の合計 13 の条件を上座部では障法 (antarāyika-dhamma) と呼び、律蔵大品大捨度に規定されている (Vinaya Mahāvagga 76.1)。

¹⁷ 得難い比丘の生活を一時的に得ることを指す。

¹⁸ 表(1)を参照

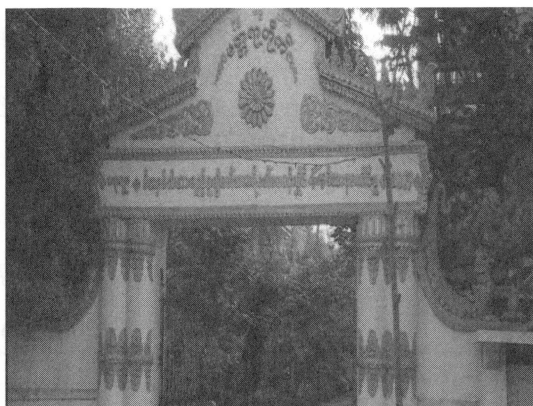
¹⁹ マンダレー市にあるタウントインジイー (Toung Twinji) 僧院を訪問し、調査した結果、一時的出家で2週間、3週間、3ヶ月間、11ヶ月間だけでは僧数報告に載せないということであった。

3. ミャンマーにおける僧院

ミャンマーでは僧院はポンジーチャオン(pongyi kyaung)²⁰と呼ばれている。しかし、僧は自分達の僧院のことを単にチャオン(kyaung)という。ミャンマーの僧院を大きく分けると(1)パリヤッティ・サーテインタイ(Pariyatti-sartintige 教法の僧院)(2)パティパッティ・チャオンタイ(Paṭipatti-kyaungtige 行道の僧院)の二種がある。ミャンマー全国の僧院数は 2019 年度の宗教省の調査報告によると、パリヤッティとパティパッティ合わせて 6887 院²¹ある。

3-1. パリヤッティ・サーテインタイ

僧が仏典を勉強する所である。ミャンマーのパリヤッティ僧院での經典教育制度はムーラ(Mūla)、パタマ・ンゲー(Pathama-nge)、パタマ・レッツ(Pathama-lat)、パタマ・ジー(Pathama-gyi)、ダンマーチャリヤ(Dhammācariya 法師)などがある。それらを分かりやすく一般教育のレベルに合わせてみると、ムーラ(Elementary 初等)、パタマ・ンゲー(Basic 初級)、パタマ・レッツ(Intermediate 中級)、パタマ・ジー(Advance 上級)、ダンマ



マダヤー・パリヤッティ・サーテインタイの門

ーチャリヤ(Dhammācariya, University 大学、法師)に該当する。それぞれのレベルにそれぞれの科目がある。ここでは筆者が現地調査したマンダレー市にあるマダヤー・パリヤッティ・サーテインタイ(Mattaya Pariyatti-sattintige マダヤー教法の僧院)を事例にする。²²レベルと科目を以下の表(3)にまと

²⁰ ポンジーは年配の比丘や、住職となっている比丘に対する呼び方である。チャウンは寺院及び学校の建物を指す言葉である。

²¹ 表(2)を参照

²² 2020 年の現地調査による結果。

(6)

ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰（ティン）

めた。

表(3) 僧院での經典教育制度のレベルと科目

レベル	科目
ムーラには二種ある。 レ・エレメンタリー(Pre-Elementary 初等前)	①ターマネィの学修と義務②パーリ語文法(Kaccāyana-Sadda 或は Magadha-Sadda)科(2篇)③『アビダンマアッタサンガハ』(Abidhammatthasāṅgaha)科(5 章)、④パリッタ(paritta 護呪經)科(11 經)科などがある。
エレメンタリー(Elementary 初等)	①『律蔵』(Vinaya)科(aniyata-sikkhāpada 不決定の戒条)、②パーリ語文法科(3 篇)、③『アビダンマアッタサンガハ』(5 章)、④三つの論母(Tika-Mātikā)科などがある。
パタマ・ンゲー	①『律蔵』科(bikkhu-pāṭimokkha 比丘戒条)、②パーリ語文法科(5 編)、③『アビダンマアッタサンガハ』(7 章)、④論母・界論(Mātikā-Dhātukathā)⑤本生経註釈(Jātaka-Aṭṭhakathā)科などがある。
パタマ・レッ	①『律蔵』科(比丘・比丘尼)、②パーリ語文法科(7 編)、③『アビダンマアッタサンガハ』、④・論母・界論⑤双論(Yamaka)科(下)、⑥本生経註釈科などがある。
パタマ・ジー	①『律蔵』科(比丘・比丘尼)、②パーリ語文法科、③『アビダンマアッタサンガハ』、④双論科(上)、⑤発趣論(Paṭṭhāna)科、⑥辞典、莊嚴、聖語(Abidhāna, Alankārā, Chanda)科、⑦本生経註釈科などがある。パタマ・ジーレベルの国家試験に合格するには通常1年かかるが、2年かかる場合もある

	という。
ダンマーチャリヤ	①『律藏』の波羅夷部の本文、註釈書、復註書(Parajika-Pāli, Aṭṭhakathā, Ṭīkā、Gaṇḍi)科、②『経藏』の戒蘊篇の本文、註釈書、復註書(Sīlakkhandhavagga-Pāli, Aṭṭhakathā, Ṭīkā, Gaṇḍi)科、③『論藏』の法集論の本文、註釈書、復註書(Dhammasaṅgārī-Pāli, Aṭṭhakathā, Ṭīkā, Gaṇḍi)科などがある。そのレベルの国家試験には、基本的には3年間で合格できるが、受験者の能力により5年から10年もかかる場合もあるという。 ²³

またここでは、マダヤー・パリヤッティ・サーティンタイの僧院生活の一日のスケジュールを以下の表(4)にまとめて紹介する。

表(4) 僧院の一日のスケジュール

午前 4:30～5 時	起床、身支度
午前 5～6 時	朝食の托鉢、食卓の準備
午前 6～7 時	学生皆で朝・掃除・ゴミ片付け
午前 7～8:30 時	昼食の托鉢
午前 8:30～10 時	校舎で授業
午前 10 時～10:30 時	休憩
午前 10:30～午後 1 時	学生皆で昼食 自由時間（入浴、自習、字の練習、昼寝）
午後 1～3:30 時	校舎で授業

²³ 当僧院には、ムーラからパタマ・ジーまでであるが、パタマ・ジーを終了後はダンマーチャリヤがある僧院に移動。

(8)

ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰（ティン）

午後 3:30～5 時	復習、休憩
午後 5～6 時	校舎で授業
午後 6～7 時	学生皆で仏陀に礼拝
午後 7～10 時	復習、昼に勉強した科目を先生の前で暗唱、字の練習
午後10～	就寝

以上が一日のスケジュールである。また1ヶ月に二回の小テストがある。その小テストで1～3位になった学生は賞を与えられ、決められた単位数に達しなかった学生は罰を与えられたりする。

3-2. パティパッティ・チャオンタイ(Paṭipatti -vihāra 行道の僧院)

パティパッティ・チャオンタイには①ヤックェツ・ポンジーチャオン(yatkwat pongyi kyaung 街中の僧院)と②イエイター(yeik thar 瞑想センター)がある。それらについて以下の通りに紹介する。

3-2-①. ヤックェツ・ポンジーチャオン(yatkwat pongyi kyaung 街中の僧院)

これは住民が礼拝出来るように住宅の近くに建てられた僧院である。礼拝に来た住民に説法するのが僧院長の義務である。僧院長をチャオン・タイ・ポンジー(kyaung thai pongyi 住職)という。チャオン・タイ・ポンジーになれるのは少なくとも10 安居を過ごしてからである。また、律蔵を熟知し227 の戒と捷度義務(大品、小品)の運営規則をしっかりと守りマスターすること、ヴィパッサナー実践法が指導出来るようになることがチャオン・タイ・ポンジーになるための基本条件である。

僧院にはチャオン・タイ・ポンジーをサポートするためコーイン(沙弥)、ポートウートー(phoe thu taw)などの出家者やカッピヤ(kappiya 浄人)という在家信者も生活している。こういう構成の僧院は村ではよく見られる。村の僧院では一つの僧院に1人の比丘が居る。

コーイン(沙弥)

ヤッケンの僧院又は村の僧院でのコーイン²⁴は、チャオン・タイ・ボンジーを支援するのは他と同じだが、将来はその僧院のチャオン・タイ・ボンジーとなり、僧院を継ぐという特色を持つ。

ポートウートー²⁵

ポートウートーとは八戒を守り、剃髪し、白衣を着る出家者で僧を支援する者である。「ポー」は男性で「トゥートー」は純粋な気持ちを持つ者、誠実な者であることを意味する。ポートウートーは僧が戒律で禁じられているため出来ない事(例 買い物)を代行する。また、コーインを目指して、その前段階としてポートウートーになる場合もある。

当番で毎朝の僧の托鉢中に、施しのおかずを天秤棒で担いで運んだり、托鉢行列の先頭でチーズイー(kyizi 鉦)を叩いたり²⁶して支援する。昔は大人のポートウートーが居たそうだが、最近は少年しか見られない。



チーズイー(鉦)を叩くポートウート

カッピヤ(kappiya 浄人)

カッピヤは僧院に住む在家の男性²⁷のことである。カッピヤはパーリ語のカッピヤ・カーラカ(kappiya kāraka)に由来し、その省略形である。また、ボンジー・チャオンター(英訳:monastery student)とも呼ばれる。カッピヤとは僧が戒(sīla)と律(vinaya)によって禁じられ、実行出来ない事を僧の代わりに、ポートウートーと同じように行う者である。

²⁴ コーイン(沙弥)の戒律については本論の「2. 現代における二種の僧」を参照。

²⁵ Toung twin gyi 僧院のチャオン・タイ・ボンジーを訪問し、聞き取りした結果より。

²⁶ チーズイー(鉦)を専用棒で叩いて音を鳴らしながら歩いて行く。チーズイー音を鳴らすのは、住民に僧の托鉢を知らせるためである。

²⁷ 未成年者が多いが大人のカッピヤも居る。

ブッダタータナー (Buddha Sāsana 仏陀の教え) を伝える任務を果たしている比丘は、世俗的な欲望を捨て去り、日々パリヤッティ (教法)、パティパッティ (行道)、タータナー (伝道) を実践している。比丘は戒律に従って行動し、発言し、食事も摂るので、食事を用意したりなど、自らは実行出来ない事が多い。そのような事を、コーイン (沙弥) や在家信者が代行し、支援する。コーインも戒によって出来ない場合は、カッピヤがそれに当たる。優秀なカッピヤによって『律藏』が完遂されるのである。こうしてカッピヤが律に詳しく優秀であれば、比丘は戒律を守ることができる。比丘が戒律を守れば戒律も清められ、タータナーも清められるのである。清浄なタータナーが存在すれば人々は布施し、戒を守り、ヴィパッタナー (vipasāṇā 瞑想の実践) したりして功德を積んでいくようになる。人々の行為が清まると人間、神、涅槃などへ至るのである。それ故に仏教徒は律藏をサポートする優秀なカッピヤになるため並々ならぬ努力をする。比丘が幸せで健康であり、戒律をしっかり守れば仏陀の教えは永遠に存在できるのである。このように比丘が戒律を全うするためにはカッピヤが必要である²⁸。

カッピヤはその奉仕により、金品の必要なく功德を積むことが出来るのである。最近ではカッピヤになるのは貧困家庭の出身者だと考えられている。事実僧院に住んでいる殆どの在家少年は貧困家庭の出身である。本来、カッピヤはミャンマー仏教徒全員がやるべきである。ミャンマー全国の男性が進んでカッピヤになれば、ミャンマー仏教はより強力に、より確かなものになると考える。

3-2-②. イェイター (Yeik thar 修行場)

イェイターには僧だけではなくティーラシン (尼僧)²⁹も住んでいる。ここでは一例として、筆者が現地調査したマンダレー市にあるナガー・イェイター (Nagar Yeik tar 龍修行場)³⁰を紹介することにする。

²⁸ 宗教省 (1996) を参照

²⁹ 出家者で剃髪し、八戒を守り、桃色の衣を着る女性のことを「ティーラシン」、「メーティーラ」、又は「サヤーレー」とも呼ぶ。それぞれ、「ティーラ (sīla 戒) シン (持つ者)」、「メー (女性) ティーラ (sīla 戒)」、「サヤー (師) レー (小さい)」という意味である。

³⁰ 裕福な女性在家信者ナガー・ドーウ (Nagar Daw Oo) が 1952 年に建てて寄付したので、その名に由来する。ナガー・イェイターという名で知られているが、正式名称はサテュボンミカ・メギン・イェイター (Satubhumika maggāṇi Yeik thar) という。

ナガー・イエイターには比丘 10 人、ターマネ
イ 3 人、ティーラシン 85 人とヨーギー³¹ (yogī 修
行者) 10 人が居る。僧、ティーラシン、ヨーギ
ーはそれぞれの小寺を持つ。ナガー・イエイ
ター内で僧の寺とティーラシンの寺は煉瓦の
壁で区切られており、ティーラシンの小寺は
83 棟³²ある。ティーラシンは僧の指導に従って



僧の寺とティーラシンの寺の区切り位置

生活しなければならない。また、ティーラシンの生活全般の相談事などにはティーラシン長が対応
する。ティーラシン希望者が来た時には、僧院長に報告しなければならない。ナガー・イエイターの
ティーラシン達の一日のスケジュールは以下の表(5)にまとめた。

表(5) ティーラシンの一日のスケジュール

午前 3:30～4 時	起床、身支度
午前 4～5 時	アテュバ・カマタン (asubha-kammaṭṭhāna 不浄業処) を唱える
午前 5～9 時	自由時間 (料理、掃除、洗濯)
午前 9～10 時	比丘から戒律を受ける
午前 10～午後 12 時	自由時間 (昼食、入浴、昼寝)
午後 12～1 時	アテュバ・カマタンを唱える
午後 1～4 時	比丘の説法を聞く (説法は 3 人の僧が 1 時間ずつ交代です)
午後 4 時～	自由時間 (瞑想、仏陀に礼拝、就寝)

³¹ 剃髪しないが、八戒を守り、茶色の衣服 (場合によって、上着は白で下着茶色も) を着る女性のこと。

³² 未成年のティーラシンは大人のティーラシンと一緒に住まなければならないため、小寺が 83 棟になっている。

上は雨安居の3ヶ月間のスケジュールで、雨安居以外の9ヶ月間は午前4時から5時、午後1時から2時、午後4時から5時にはアテュバ・カマタンを唱える。僧から戒律を午前9時に受ける。また、週に2日托鉢をする。ティーラシンの托鉢は僧と違い、午前7時から午後4時までと長時間である。また、ご飯でなく生米を主として受け取り、各自で炊事する。

また、瞑想センターのイエイターもある。例えば、モゴック(Mogok)瞑想センター³³、マハーシ(Mahāsi)瞑想センター³⁴などがある。これらは誰でも宿泊でき、瞑想出来るイエイターである。一回の課程は最短でも10日間である。本論では瞑想センターの僧院生活については触れない。



ティーラシン

4. 僧の托鉢について

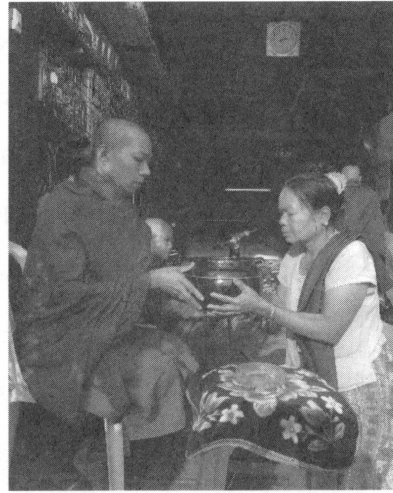
僧の日々のソン(son 食事)は托鉢によって得た食料で賄われる。毎日の托鉢は非常に重要な日課として位置付けられている。

ミャンマーのマンドレーでの托鉢僧は4種類ある。それは、①タイ・コートー(htai ko taw 家に入って座って托鉢出来る僧)②ヤッ・コートー(yat ko taw 家の前で立って托鉢する僧)③ボッソン・コートー(bone son ko taw これについては後に説明)④タン・コートー(tan ko taw 行列で托鉢する僧)である。

³³ モゴック瞑想センターのサヤトーが作成した縁起輪図は世界的に有名である。センターはアマラブラ(Amarapura)市にある。

³⁴ マハーシ瞑想センターはミャンマー国内だけではなく世界各地に展開し、東南アジア(タイ・インドネシア・ラオス・カンボジア)にも広く知られている。

- ① タイ・コートーは屋内で托鉢を行う。僧は家の中に用意されたテーブルの上に鉢を置き、椅子に着座する。信者はタイ・コートーのために用意したソンとソンヒン (son hin 惣菜) を鉢の中に入れる。また鉢を持ち上げて僧の手に渡してから三回拝む。タイ・コートーは、知人に紹介された場合³⁵やタイ・コートーとして招かれた場合などがある。この条件が満たされる必要があるため、タイ・コートーの実現は非常に難しい。五つのタイ・



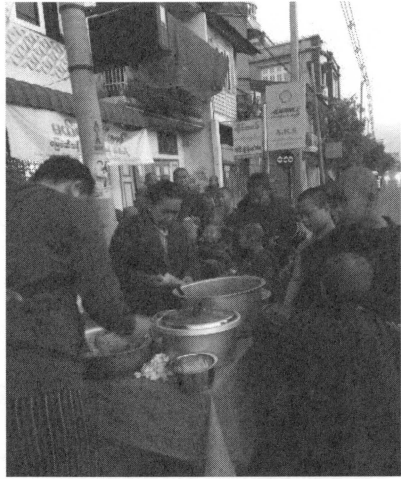
鉢を持ち上げて僧に渡している信者

- エイン (座って托鉢できる家) があれば1日のソンは事足りる。タイ・コートーになれば決まった家のみに行けばいいので、托鉢時間は短縮できる。短縮出来た時間は講義の復習に利用できるそうである。
- ② ヤッ・コートーは家の前に立ち、托鉢を行う。紹介や招待がない場合タイ・コートーにはなれず、ヤッ・コートーになる。僧は自ら托鉢する家を決め、毎日その家の前に立って托鉢をする。ソンとソンヒン (ご飯と惣菜) は毎日得られるわけではない。ソンだけ得られる場合もあれば、ガトツソン³⁶ (ka tot son 施食を断る言葉) だけの場合もある。十分なソンを得るためには何軒もの家を回らなければならない。屋内へと招かれた場合は、家の中で托鉢を行う。
- ③ ボンソン・コートーは紹介や招待などがなく、また各家の前に立って托鉢する勇気がない僧のことである。ボンソンとは一般の僧のご飯という意味で、大量のソンとソンヒン (ご飯と惣菜) を作

³⁵ 紹介されても当該家庭から断わられてタイ・コートーになれない場合もある。

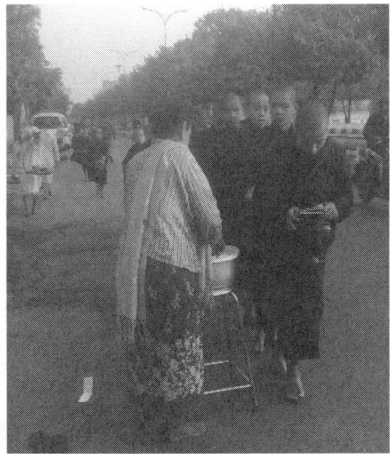
³⁶ これはパーリ經典に在家信者が僧の托鉢を断る際の言葉 *aticchatha* (他で求めてください) に由来する。

って四方から来る托鉢僧に布施することである。信者達がボンソンを集めて団体で行うこともあれば、個人で行う場合もある。毎日行う団体もあれば、曜日を決めて週に一回・二回など行う団体もある。個人で行う場合も同様で、曜日を決めたり、月に一回・二回行ったりする。ボンソンは朝 4 時半から 6 時ぐらいの間に行われる³⁷ので、ボンソン・コートーはそれに間に合うように各ボンソンを回らなければならない。托鉢僧の中でもボンソン・コートーは最も苦勞が多い僧である。



ボンソンを行っている信者

- ④ タン・コートー（年齢順に並べる）とは行列して托鉢を行う僧伽である。僧数の多い僧院の方がよく行う。僧が何人かずつのグループに分かれ、当番を決める。当番の僧達が行列して僧院の代表として托鉢を行う。当番で決めた町、通る道、実施する曜日、時間帯（午前 8 時頃まで）に回って行く。タン・コートーに布施したい信者はそれに合わせて布施をする。



タン・コートーに布施している信者

托鉢時には托鉢僧も信者もこれを裸足で行わなければならない。托鉢僧の鉢にご飯を入れる時、肩の上には小さいタオルをかけて右手でご飯を入れる。

ご飯を入れる時、僧の手に触れないように気をつけながら行う。1人の僧への布施を通して、僧伽に対する真心で行う事が大切である。

托鉢は、午前 5 時頃から 8 時頃まで行われる。そのため信者達は、午前 4 時頃から起きて自分の

³⁷ 個人で行う所では 7 時半頃までである。

顔、身体を清め、托鉢僧の分も含めて、ソン(ご飯とお総菜)を作る。新しい炊き立てのご飯やお総菜が出来上がると、まず仏壇にソントー(son to ご飯やお惣菜と浄水)を供える。それから托鉢僧に布施する。これらは午前中に行わなければならないことである。

5. 比丘が主宰する在家者の主な儀礼

5-1. 命名式

命名式をキンブンテッ・ミンガラー(kin bun tat mangala 名前を付ける祝祭)と言う。キンブン(kin bun アカシアの実)を煮た液体を冷やして子どもの頭を洗って名前を付ける式である。昔は子どもが生まれて7日目にキンブンテッ・ミンガラーを行った。助産婦が子どもの頭をタヨ・キンブン(ta yaw kin bun)シャンプー³⁸で洗って体を清め、おくるみに包んで母親に渡す。これはミャンマー王の戴冠式を真似て行ったと考えられている。また助産婦と招待された来客が子どもの祝福を祈願する。そして祝いに来た客を歓待して食事などを供する。最近ではキンブンテッ・ミンガラーを7日目に行う習慣は見られなくなった。³⁹



タヨ・キンブンシャンプー

ここでは、筆者が現地調査を行ったキンブンテッ・ミンガラーを紹介する。

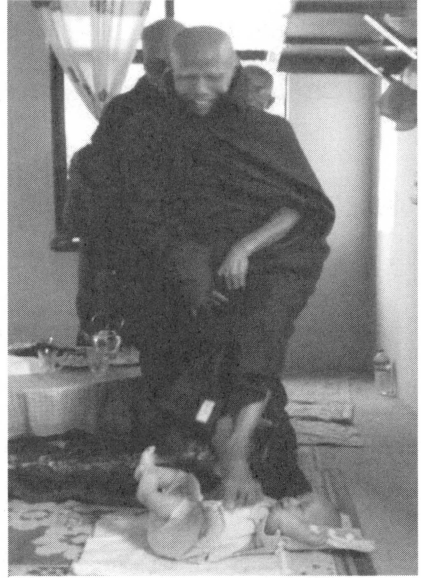
現地調査の結果では、生まれて 100 日目に行っている。式の前に名前を決め⁴⁰て招待状を作る。式の 2 日か 3 日前に招待状を送る。5 人の比丘を祈願のため依頼しておく。比丘が来る前に助産婦が子どもの髪の毛を剃ってタヨ・キンブンシャンプーで洗う。ミャンマーのシャンプーではタヨとキンブンはなくてはならない物である。その二つには霊的力と魔法の力の効果があると信じられている。頭

³⁸ ミャンマーの伝統的なシャンプー。タヨ(つる草類)、キンブン、ライムなどを水煮した物。

³⁹ 筆者の体験と Dr Hla Pe (2004)による。

⁴⁰ ミャンマーでは生まれた曜日によって名前が付けられる。ミャンマー人にとって生まれた曜日は非常に重視されている。自分が生まれた曜日の惑星の力が、自分の性格や運勢などに影響を及ぼすと信じている。

を洗って体を清めた後母親に渡す。比丘が来たらまず、比丘に食事を出す。比丘は食後に家族と来客に①子どもに悪事をさせない②慈善を行わせる③学問と芸術を学ばせる④息子・娘を相応しい伴侶と結婚させる⑤適切なタイミングで遺産を継がせるなどの子どもに関してのミバ・ヴァツ(mātāpitara vattaṃ 親の責任)⁴¹についての説法をする。また子どもの命名をし、子どものため祈願して、その日の功德をイエゼイチャ⁴²・アミヤウエー⁴³(yeizet kyat amya wai 水注ぎ、廻向)させ、説法会を終える。僧が帰る時、親は子どもを仰向きにして比丘の通る所に置く。その結果全員の僧が子どもを跨いで帰る。それは子どもが「悪運に合わないよう」、「健康で長生きするように」という意で行われる。比丘が帰ってから来客に食事を供する。



子どもを跨いでいる比丘達

イエセツチャとアミヤウエーまでの式の構成を、ここで次のようにまとめて紹介する。比丘の食事後に在家信者達が先ず、「オーガータ」(Okāsa 聴許)と三度唱え、祈願文(ミャンマー語にパーリ語の混在したもの)を唱える。そして比丘が三帰依、五戒授与の請願文(パーリ語)を唱える。その時に在家信者達は比丘の言葉の後に合わせて一節ずつ唱える。また、式に応じてミャンマー語、パーリ語混交のアヌモダナー(anumodana 随喜)の説法をする。そして比丘僧一同でパリッタ(paritta 護呪)を唱えたりする。最後にイエセツチャの経文⁴⁴を唱える。その最中に寄付者がイエセツチャを行う。イエセツチャ

⁴¹ 『経蔵』長部「シンガーラ教誡経」(Suttapiṭaka-Dīghanikāya-Pāthikayaggaṇāli Sīṅgalovādasuttaṃ)に基づいている。同経典の当該記述を示す: Pāpā nivārenti, kalyāṇe nivesenti, sippaṃ sikkhāpenti, patirūpena dārena saṃyojenti, samaye dāyajjaṃ niyyādentī. (Cs pp 154 /PTS pp 190)

⁴² 積善行為を大地に認めて貰う意で行う。

⁴³ 亡くなった親類の者たちを含め、人々に功德を転送する意で行う。

⁴⁴ idaṃme puññaṃ āsavakkhayaṃ hotu. 「私のこの功德が、煩惱が尽きる涅槃に至るように。」
imaṃme puññaṃ sabbaṃ sabbasattānaṃ bhājema. 「この得られた功德をすべての生き物に分配する。」
以上の経文をパーリ語とミャンマー語を混交して唱える。

が終わるとすぐに皆は一斉でアミャウェーを行い、「ターデュ」(sādhu 善い)と三度唱え⁴⁵て式を終える。

5-2. 結婚式

結婚式をミンガラー・サウン(maṅgala saung)という。本来近隣 7 軒に認めて貰えば成立するという言い伝えがある。ところが、現在では、披露宴、二次会、三次会、四次会、五次会まで行われている。全ての会でミャンマーの結婚式の伝統的な形式で行う。典型的な結婚式には、ミャンマーの伝統的な式、披露宴、ディナーがある。また結婚式は7月中旬から 10 月の中旬まで雨安居の 3 ヶ月間には行われない。

さてここで、筆者が現地調査をしたミャンマーの伝統的な結婚式を紹介する。ミャンマーの伝統的な結婚式は僧院で行われることが多い。式の日が決まったら僧院長に連絡してその日を予約しておく。また、僧院に居る僧の数を確認して、僧の朝食と昼食の準備をしておく。また親戚と招待客に送る招待状と共に食事の量を確認しておく⁴⁶。そして僧に布施する袈裟などの八物とミンガラー・ガトープイエ(ヤシの実などが入ったステンレスのボール)⁴⁷を用意しておく。それらの準備を前日までに完成しておく。

新郎新婦は当日の午前 2 時頃に起きて化粧の準備をする。その後午前 5 時前後に僧院に行き、僧院の僧伽全員に朝食を布施する。午前 7 時頃から双方の親戚や客を接待する。また、午前 10 時半頃に僧全員に昼食を出す。僧に食事を布施する時、ご飯と色々な料理をテーブルの上に置いておき、代表の比丘 1 人か 2 人に着席して貰う。そして、そのテーブルを新郎新婦は少し持ち上げ食事を差し上げる敬意を表し、比丘はテーブルに手を添える⁴⁸。比丘の食後、新郎新婦と来客はオーガータと

⁴⁵ アミャウェーとターデュの唱え方は、「アミャ」・「アミャ」・「アミャ」と唱えてすぐに「ターデュ」・「ターデュ」・「ターデュ」とセットで三度唱える。

⁴⁶ ミャンマーの伝統的な結婚式では僧にも来客にも米類か麺類を供する。

⁴⁷ 一つのヤシの実を(大)5 房のバナナで囲い、花などを飾ったステンレスの大きいなボール。ミャンマーの宗教的儀式によくみられる。

⁴⁸ この行為をソン・ケツ(son kept ご飯を差し上げる)という。ご飯だけではなく四依を布施する際も同様である。

祈願文を唱え、比丘は新郎にレイン・ヴァツ(sāmika vattaṃ 夫の五つの責任)⁴⁹と新婦にマヤー・ヴァツ(bhāriya vattaṃ 妻の五つの責任)⁵⁰に対するミャンマー語、パーリ語混交のアヌモダナー(anumodana 随喜)⁵¹の説法をする。また、説法中に新郎新婦は僧のために用意した袈裟などの八物とミンガラー・ガトープイエを布施する。そして比丘僧一同でパリッタ(護呪)を唱える。最後にイエゼイチャ(水注ぎ)の経文を唱える。その時に新郎新婦と来客は比丘の言葉の後について一節ずつ唱える。それと同時に新郎新婦はイエゼイチャの作法を行う。そして皆でアミヤウエー(amyā wai 廻向)をして説法会を終える。



八物を布施している新郎新婦

イエゼイチャでは新郎新婦は、比丘が唱える経文に合わせ水を銀製の容器に注いでいく。その時新郎新婦は各自で持った水差しの水を一つの銀製の容器に一滴ずつ注いでいくが、これは縁結びの意である。以上がミャンマーの伝統的な結婚式の風景



イエゼイチャを行っている新郎新婦

⁴⁹ 『経蔵』長部「シンガール教誡経」の記述を示す:sammānanāya anavamānanāya anaticariyāya issariyavossaggena alankārānuppādānena. (Cs pp 154-155 / PTS pp 190-191)「夫の五つの責任とは妻を呼ぶ時敬愛をもって呼ぶこと、軽蔑して話さないこと、妻以外の女との淫らな情事をしないこと、台所の処置を任せること、袋飾品を与えることである。」

⁵⁰ 『経蔵』長部「シンガール教誡経」の記述を示す:susārvihitakammantā ca hoti, saṅgahitaparijanā ca, anaticārini ca, sambhatañca anurakkhati, dakkhā ca hoti analasā sabbakiccesu. (Cs pp 154-155 / PTS pp 190-191)「妻の五つの責任とは家の中の仕事をよく処理すること、両方の親族の面倒を見ること、夫以外の男との淫らな情事をしないこと、夫が働いて集めた財産を管理すること、全ての家の中の仕事を上手にこなして怠らないことである。」

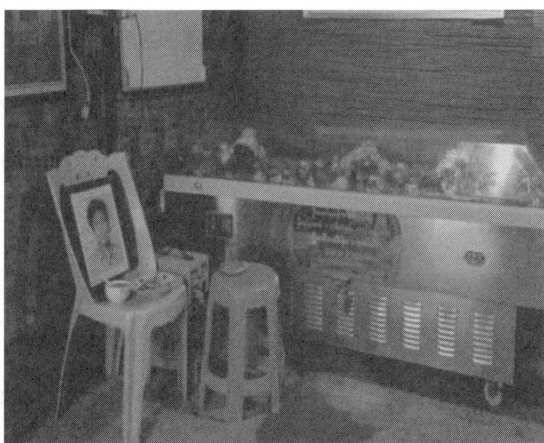
⁵¹ アヌモダナーは、anupunappunam modetī anumodana「再三再四、喜悅させる、というのが随悦である」を指す。寄付者が布施又は実践(戒を守ること、瞑想など)で得た功德を、再三にわたり考え続ける際に喜悅していることをアヌモダナーという。

である。

5-3. アテュバチャ(a thu ba cha 葬式)⁵²

ミャンマーでは葬式は死者の自宅で行うが、遺体を置く位置が死んだ場所によって異なる。自宅で死ぬ(例・病気、老年など)と自宅外で死ぬ(例、事故で即死、病院で死ぬなど)という二種類がある。自宅で死んだ場合は遺体を自宅内に置いて式を行う。自宅外で死んだ場合は遺体を自宅まで運べるが、自宅の外に置いて式を行う⁵³。

遺体を水で清める。その後死者が一番好きだった衣服を着せる。それからベッドの上に置き、更に新しい衣服を体にかけて置く。口の中に小銭を入れておく。それは彼岸に渡るためのガドゥカ(ga do ka 船賃)である。遺体を置いたベッド⁵⁴の近くに水を入れた壺を置いて



遺体の横に食事を与えている風景

おく。自宅に遺体を2日か3日間程安置し⁵⁵、その間遺体の横に毎回食事などを供する⁵⁶。7日間、死者の魂が出入り出来るように自宅の入口は24時間開けっ放しにしておく⁵⁷。そういう準備を伝統的な

⁵² アテュバチャ(a thu ba cha)は、文字通りには遺体(アテュバ)安置(チャ)の意味である。

⁵³ 家族が自宅内に置きたい場合も周りの住民が許さない。それは外で死んだ遺体を家の中に入れると町に不幸が起きて3人連続で死ぬことになる信じられているからである。

⁵⁴ 最近は冷蔵棺桶の貸出があるので冷蔵棺桶に入れる事が多い。

⁵⁵ 自宅に何日安置しておくのかはその家族の経済的なレベルによって異なる。また、遠近の親戚が集まるまで待つかどうかによっても異なる。

⁵⁶ 死者が好きだった食べ物とおやつなどを一日に3食供する。それがもし餓鬼道に生まれ変わったら食事のため、困らないように用意して上げるという意である。

⁵⁷ これは『ダンマパダ註』XVIII.3「ティッサ長老事」の記述に基づいている。あらすじは以下の通りである。

ティッサ長老はある日衣の布を得て、それを持って精舎に行き、衣作りを行わせた。衣が出来上がった日にはまた過分の供養を行った。彼は衣を眺め、衣に愛情をもっていた。その衣を翌日に着ることに決め、畳んで竹の衣架に置いた。その夜には、食べた食べ物を消化させることが出来なくなって、死亡し、同じその衣に風となって生まれ変わった。

比丘たちは彼の葬式をしてから、看病人がいないため僧団の所有物になった彼の衣を、皆で分配すること

習慣に詳しい人の指導を受けながら行う。ミャンマーでは葬式に関する諸行事は近所の人々が手伝うので、家族はあまり心配しないでよい。ミャンマーでは「おくりびと」のような職業はない。「近所が良ければ遺体が綺麗だ」というミャンマーの言い伝えがある。人が死んだら家の前に白い布で作ったテントを置いておく。白いテントは死者があるというサインでもある。

葬儀が終わるまでは死者のある家は悔やみを言いに来る人、遺体を見守る人などで混んでいる。弔問客は、死者の家族が金持ちの場合アクー・ンウェ(a ku new 香典)を受け取らないので、袈裟や花輪等を持参する。高齢者は人生の無常を感じて、それによって更に信仰心を強くするようである。若者は24時間開けっ放しにした死者の家の見守りをトランプなどしながらすることが多い。

葬儀の当日には、遺体を運ぶ前に、死者の自宅に子どもがいれば、子どもの身長を測った糸を棺に入れる。それは子や孫への愛着を断ち切って彼岸へ行って貰うためである。午前10時頃に招いた比丘5人(3人や1人の場合もある)が到着して遺体の横でタラナゴンティン⁵⁸(ta ra na gon tin 仏法僧を得る)式を行う。その式が終わると、遺体を棺に入れてニツバンイン⁵⁹(ni ban yin 涅槃に送る車あるいは霊柩車)に運んで行く。その時遺体の近くに置いた壺を割る⁶⁰。遺体を運んだニツバンヤインのすぐ後ろに家族の車、その次に親戚の車、次は参列者の車などの順番で行列を作って墓地に向かう。墓地に向かう経路にはルールがある。死者の家から西か北の方に向かってニツバンインが出発する⁶¹。

以前は土葬もあったが、最近では火葬が多い。火葬する前に死者が親、先生、恩人、世話をした人

に決めた。それを聞いた風が、「比丘たちは私の所有物を奪う」と鳴いて、あちこちに走り回った。そのことを仏陀が聞き、比丘たちに衣の分配を7日間放置するように指示した。風も7日目に死亡して天界に生まれ変わった。仏陀は8日目に衣の分配を許した。比丘たちが衣を分ける時に風が怒ると地獄に生まれ変わるからである。また、風の寿命も7日間しかないので、その間を待たせたのである。以上については、及川真介(2016), pp. 487-491を参照

ミャンマーの葬式は以上の事例に由来し、親の財産はヤッレイン(yat lal son 七日法要)が済んでから行う習慣がある。

⁵⁸ 人間は死後には仏法僧を得る事が出来ないが、仏法僧を得た人々の功德を廻向して貰えるので行った式である。

⁵⁹ ニツバンインのニツバンは nibbāna(涅槃)で、インは車である。静かで落ち着いた墓地に車で送ることを、繰り返す再生の輪廻から解放された状態に落ち着くニツバンに例えて、ニツバンヤインと名づけたと思われる。また、ミャンマーでは仏像や仏壇に使われる用品などを売買する店をニツバン・クンテ(nibbāna kung tai 涅槃商売)という。

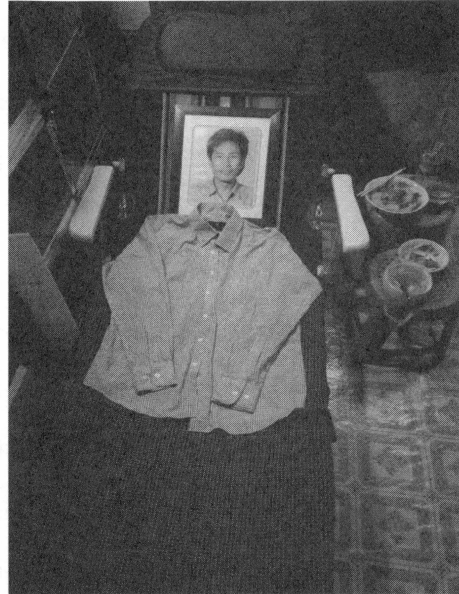
⁶⁰ 「家族との縁はここまでだ」という縁を切る意で行う。

⁶¹ 王制時代からその習慣があり、マングレー王宮の西北にあるアミンガラ・タダー(amaṅgala tadar 不幸な橋)は遺体を運ぶため使われた。第二次世界大戦で壊れ、現在は使用できない。

である場合、世話になった人達は最後の合掌、礼拝をする。そして死者の魂が遺体の上に掛けた衣類に付いてくるように言って家に持ち帰る。死者の魂が付いている衣類を持つ人は、死者の自宅に到着するまでは誰とも話せない。話すと魂が逃げていくと信じられているからである。死者の自宅に到着したら、死者のベッドの上に持ってきた衣類を広げておき、食事を供する。これを死亡日から数えて 7 日目まで続ける。

即死、出産中に死んだ女子、満月や新月の日

に死んだ遺体の場合は、葬式は当日に行わなければならないと考えられている。



死者の魂が付いた衣服をベッドに置いた風景

ヤツレイソン(yat lal son 七日法要)⁶²

人が亡くなった当日を 1 日目と数えて 7 日目に当たる日に 法要を行う。ヤツレイソンのソンは比丘の食事の意であり、7 日目に比丘に食事を供する式である。

法要では午前 10 時頃に招いた 5 人の比丘が到着する。まず比丘に食事を出し、袈裟などを寄付する。食後は家族が死者の魂が座れるように一ヶ所を用意しておく。それから招待された来客と一緒に比丘の説法を聞く。比丘の読経中に死者のためイエセツチャ(水注ぎ)をし、アミャウエー(廻向)して法要を終える。最後に来客に食事を供する。

ここでのイエセツチャは家族皆が、1 人に一つの水差しと容器を持って、水差しの水を容器に一滴ずつ注いでいく。そして自分達の功德を死者にアミャウエーをする。アミャウエーを行う意は、死者が天道、人間道、修羅道、畜生道、地獄道に生まれ変わったらそのアミャウエーを得ることが出来ないが餓

⁶² ヤツレイソン(yat lal son)のヤツは日にちを、レイソンは施食を意味する。

鬼道に生まれ変わったらアミヤウエーを得ることが可能であるからである。

7 日目に行われるものをヤッレイソンといい、1 ヶ月後に行われるものをレイソン (la lal son 月忌法要)、一年後に行われるものをニツパレイソン (nhit pat lal son 年忌法要) という。

6. 終わりに

比丘に関する儀礼と信仰を現地調査成果に基づいて述べた。現地調査はミャンマーのマンダレー市にある僧院と僧について行ったが、ミャンマー全国における僧信仰は殆ど同様である。そして、ミャンマー第三の都市であるマンダレー市の方が信仰がより深い。全国でも僧の数と僧院が多い街である。僧が多いほど布施者も多く、どれだけ物価が上昇しても僧の托鉢に困らないように頑張って布施している信者が多い。パリヤッティとパティパッティ・チャオンタイが多く、前述した 4 種の托鉢僧が 4 種とも全て見られるのがマンダレー市である。

また、比丘が関与する命名式、結婚式、葬式について述べた。それぞれの式には必ずイエセツチャとアミヤウエーを行う。イエセツチャが終わるとすぐにアミヤウエーをして式を終える。イエセツチャは結婚式や葬式など特別な儀式の際に行われるが、アミヤウエーは仏陀に礼拝したり、托鉢僧に布施したり、経を唱えるなどの家庭での日常的儀礼において必ず行うものでもある。また、色々な式にはアヌモーダナー（随喜）の説法を行うが、葬式の場合はアヌモーダナーの説法を行わないでタンウェガ (samvega 厭離心) に関する説法を行う。

以上は在家信者の信仰形態と僧との関わり方の一部である。また、積徳行とイエセツチャの由来、そして僧に関する年中儀礼については次の課題とする。

表(1) 2019 年度のミャンマーにおける出家者数

管区州	サンガ(僧伽)		
	比丘	沙弥	合計
カチン	4641	2400	7041
カヤー	1056	1268	2324
カレン	10165	6375	16540
チン	320	133	453
サガイン	30037	22801	53838
タニンダー	7031	2212	9243
ネピドー	5875	5265	11140
バゴ(東)	22023	10522	32545
バゴ(西)	9879	3581	13460
マグエー	17182	12223	29405
マンダレー	51264	45921	97185
モン	20440	12305	32745
ヤカイ	6872	4061	10933
ヤンゴン	54361	34185	88546
シャン(南)	10627	27229	37856
シャン(北)	6890	20247	27137
シャン(東)	2674	8250	10924
エヤワディー	28252	11877	40129
合計	289589	230855	520444

(宗教省の調査報告による)

(24)

ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰（ティン）

表(2) 2019 年度のミャンマーにおける僧院数

管区/州	僧院	管区/州	僧院
カチン	1030	マグエー	6532
カヤー	222	マンダレー	10109
カレン	1965	モン	3013
チン	247	ヤカイ	3818
サガイン	8982	ヤンゴン	7348
タニンダー	1700	シャン(南)	2987
ネピドー	1194	シャン(北)	2120
バゴ(東)	3735	シャン(東)	1052
バゴ(西)	3780	エヤワディー	8250
合計	68087		

(宗教省の調査報告による)

略号と参考文献

略号

Cs: Chatthasāṅgīti edition

PTS: Pāli Text Society

参考文献

ウージョターランカーラ

(1985)『南方上座部仏教の教え』世界平和パゴダ

原田正春・大野徹

(1990)『ビルマ語辞典』社団法人日本ビルマ文化協会。

池田正隆

(2000)『ビルマ仏教』法蔵館

(1998)『ビルマ(ミャンマー)仏教徒と生活と信仰』雑誌名「真宗文化」第8号

U Aye Naing (Dhammācariya)

(1980) *Myanmar yoeyar Yarti Pwetomyar* 『ミャンマー伝統的な祭り』宗教省

原田正春・大野徹

(1990)『ビルマ語辞典』社団法人日本ビルマ文化協会

ミャンマー教育省

(1991) *Myanmar Abhidhāna* 『ミャンマー辞典』Yangon: Myanmar

U San Thin Hlaing (Pahta Ma Kyaw)

(1994) *tāṭaṇa amwe kan* 『仏教に入門する』宗教省

宗教省

(1996) *kappiya koung ta york* 『良い浄人とは』宗教省

池田正隆

(26)

ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰（ティン）

(1998) 『ビルマ(ミャンマー)仏教徒の生活と信仰』 雑誌名『真宗文化』第8号

(2000) 『ビルマ仏教』 法蔵館

(2007) ミャンマー上座仏教史伝『タータナー・リンガーヤ・サーダン』を読む 法蔵館

ウ・ウェーブツラ

(2000) 『南方仏教基本聖典』 中山書房仏書林

Dr Hla Pe

(2004) *The Myanmar Buddhist : His Life from the Cradle to the Grave* Translated by Dr Tin Hlaing

Yangon: Myanmar

西澤卓美

(2014) 『仏教先進国ミャンマーのマインドフルネス(日本人出家比丘が見た、ミャンマーの日常と信仰)』 株式会社サンガ

ウ・ジョーテイカ・魚川祐司訳

(2016) 『自由への旅(マインドフルネス瞑想)実践講義』 株式会社新湖社

及川真介

(2016) 『仏の真理の言葉註(三)―ダンマパダ・アッタカター―』 春秋社

(キーワード) 僧、タータナー、イエゼイチャ、アミヤウエー

(博士後期課程)